

きょうのことば

あたりまえのことというのが曲者なんだよ。

吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波文庫、81頁）

これは、中学二年生であるコペル君と呼ばれる少年に向けられた、その近所に住んでいる叔父さんの言葉です。物語の中で、人間として生きる上で大切なことを、コペル君は自分の経験とともに叔父さんから学びます。この言葉もまた、その中のひとつになります。

私は、こころの問題で鏡を通して自分を見ることができませんでした。鏡だけではなく、写真を撮ることも苦手でした。だから、人に「一緒に写真を撮ろう」と言われると、それは私にはできないことだと説明します。しかし、それを理解してもらえることは実際にあまりありません。

なぜなら、私ができないことは普通の人にはできる“あたりまえ”のことだからです。逆に言えば、他者が“あたりまえ”だと思っていることは、私には“あたりまえ”ではないのです。

この言葉は、まさに“あたりまえ”の厄介さを表しています。世の中には私以外にも、他の人とは違っていたり、普通ではないものをもっている人がたくさんいます。もしかすると、このことはすべての人に当てはまるのかもしれませんが。

人は、“あたりまえ”であることに囚われて、“あたりまえ”でないことに深い理解を示そうとはしません。そして、理解ができないからといって「自分には関係がないことだ」と関心を抱こうとしないことがあります。その上、ときに人間は“あたりまえ”でないことに自分が直面したとき、いらだちや不安に駆られて自分の“あたりまえ”を強制したり、“あたりまえ”ではないものの存在を排除しようとしています。このことは、いじめや差別、戦争などにつながります。人間が人間らしく生きるためには、他者を理解することにあるのかもしれませんが。この言葉は、そんな人間のあり方を見つめ直すきっかけになるものだと思います。

しかし、他者を理解することは決して簡単ではありません。どれだけ深く関わっても、自分には理解できないことが世の中にはあると思います。ですが、私たち人間は、たとえ理解することはできなくても、理解をしようと努めることはできるのではないのでしょうか。理解できない自分を真摯に受けとめ、その上で、どのように関わっていくべきなのかを考えていくことが大切だと思います。

他者にとって“あたりまえ”であることは、自分にとって“あたりまえ”ではないこと。同時に、自分にとって“あたりまえ”であることは、他者にとって“あたりまえ”ではないこと。そんな“あたりまえ”に気づき、自分を見つめ直し、他者を理解しようと努める気持ちが、人間らしい生き方につながるのです。他者を理解することの意味が、現代社会を生きる私たちに問われているのだと思います。

きょうのことば

大好きじゃなかったら悲しまずにすむけど、
そっちのほうが悲しいじゃないか。

重松清「くちぶえ番長」
(新潮文庫 170頁)

この言葉は、大切な存在を亡くしてしまった主人公に対して主人公の父が言った言葉である。この大切な存在は、彼のペットのワンという愛犬だった。父は彼に「ワンが死んだの、悲しいか？」と尋ねる。うん、と答えると「よかったな」と父は言うのだ。「ワンのことを本当に好きだったから悲しいんだ。大好きじゃなかったら悲しまずにすむけど、そっちのほうがかなしいじゃないか」と続ける。

この言葉の意味を、この本を読んだ小学生のときはいまいち理解ができなかった。死ぬことは悲しいはずなのに、良かった、とはどういうことなのか、と考えていた。

しかし、高校生るとき、祖父を亡くしてこの言葉の意味がよくわかったように思う。このとき、私は祖父と二度と会えないことが本当に悲しくて仕方がなかった。振り返ってみると「好きだった」からそんな風に悲しかったのだろうと思うし、もしこの時、祖父ともう二度と会えないことを何とも思わなかったならば、きっとその方がむなしくて悲しいのだろう。悲しいと思えるということは、その人の存在や、過ごした日々がかけがえのないものであるからだ。それが無いというのは繋がりが希薄だったことや、その人に対して思い入れがないことだと思う。だからこそ、悲しいと思えることは辛さと同時に、尊いものだと言えるはずだ。

この作品の中では、さらにこう続けられている。「いなくなったら悲しくて泣いちゃうぐらい大好きな相手がいるってのは、幸せなことなんだよ」この言葉も、初めて読んだあの頃より大きくなった今、本当にその通りだと思える。好きだと思える相手いや、人に限らず、他の動物やものがないということはどこか物足りないものであるとも思う。中学生の頃、好きだと言える人やものがなかったからこそ、好きなものや人たちが増えた今、それが本当にぜいたくで幸せなことだと感じている。

私は、この言葉の意味を知らないままだったら、きっと今この自分が幸せだと思えなかったと思う。大切なものを失って、ただ悲しみを悲しみとだけ受け取って、悲しめることが「よかった」と思えなかったはずだ。生きているのだから、私もきっといつか死んでしまう。けれど、生きていく中で誰かの「好きな相手」になって、私が死んでしまったその時。誰か一人にでも「悲しい」と思ってもらえるならば、そこにはきっとどちらにとっても意味があると思うのだ。